

中国大連マーイー島における地名と景観の調査

「離島」という形の人間環境に関する考察その2

李

桓*

A Survey on Place-names and Landscape at Mayi Island, Dalian, China

A Study on Human Settlements in Islands, Part 2

Li Huan

1. はじめに

本編は2002年9月17日から20日まで中国大連マーイー島において、地名と景観についての調査をまとめたものである。これまで、筆者は本紀要第43巻第1号において2001年9月に行われた第1回目の調査報告を発表した⁽¹⁾。また、第1回目の調査結果に基づいた研究論文を、国際会議などの機会において発表した⁽²⁾。

本研究の目的は、「離島」という人間の居住する環境について、その特徴やあり方を明らかにすることで、マーイー島の事例研究はその一環である。前編の紀要報告においてすでに提起したように、筆者は「離島」という居住環境を「陸」のそれと対峙し、その特殊性に注目したい。日本では長い間、「離島振興」を目標に、本土との「格差」の是正を図ってきた。そこで、「離島」の特殊性が活かされてこそ、個性と魅力のある島づくりに実を結ぶと考えられる。

様々な生活条件が制約される中、「離島」は多くの場合、コンパクトな環境を形成している。したがって、人間と環境との関係を研究することにあたり、「離島」は良い対象の一つであると言える。

およそ人間とその生活環境との間は多くの場合、

場所と景観への認識によって結び付けられる。これに関しては、例えばO・ボルノウやK・リンチやイーフー・トゥアンなどの卓越した研究によって、哲学的に、都市工学的に、地理学的に解明された。

場所は多くの場合、地名が与えられ、また、地名によって人に伝わる。地名の形成は偶然のものではなく、生活史的な形成による。この点に関しても、地名学の研究によって明らかにされている。

したがって、一つの地域について、その地名や景観を通して、主体的にとらえられている固有の環境を考察することは可能である。このような主体的な環境は一種の生活史的な現実として、地域づくりをはじめ、様々な意味において基礎的なデータと発想の根拠となりえる。

本編の考察は上のような認識に基づいており、ヒアリングと現地踏査を通してマーイー島の空間を再考し、そこに潜在的に存在している（地図に載っておらず、島に関わりの深い人しか知らない）地名、その地名に関わる場所や景観、及び島の周りの景観的な特徴を明らかにしたい。

マーイー島は規模からみても、歴史的な形成からみてもまとまりのよい自然村で、近代化に伴う建設の波による影響が少なく、自然景観や伝統的な漁村風景が残されている。

* 人間環境学部 環境文化学科 助教授
2003年6月16日受付

これまで、マーイー島に関する既存の調査研究は少なく、集落に関する実測もなされていないと聞く。したがって、本調査の成果は基礎資料として村づくりに役立つと考えられる。また、マーイー島に関する研究は、渤海湾における島々の1事例として、この海域における更なる研究にも役立つ。さらに、中国における離島の事例として、日本の離島と比較するための材料にもなる。

2. マーイー島の立地的な特徴と集落空間

(1) マーイー島の立地的な特徴

大連市金州湾におけるマーイー島の地理的な立地については、すでに前編の報告で述べた。ここでは、島の地形的な特徴を踏まえながらその立地を再考する。なお、本編においても前編と同じく、明記しないかぎり、「マーイー島」は有人島である「西マーイー島」をさしている。

マーイー島は長さ約3.4kmで、幅は、最大約750mで、最小220mあまりである。地図の上から見ると、東南から北西へ伸びる細長い形となっている。島はいくつかの低い山の連なりで構成され、山の斜面に集落やトウモロコシ畑が広がる。西マーイー島と東マーイー島の間は小さな内海ができており、そこはナマコの養殖をはじめ、船の停泊に使われ、島の玄関口となる(写真-1、図-1)。



写真-1 港から東マーイー島を望む

(2) 集落の住宅と道路

集落は島の南東側のなだらかな斜面に立地し、西高東低の地形である。南と西側からいくつかの小さな山に囲まれ、東側だけ海に開放するようになっている(図-2)。

集落における住宅と道路の配置は図-3で示している。この図は目測によるもので、精度が欠けているが、各住宅は南側に庭をもつという一定の規則性があることが分かる。住宅の内部の配置については前編で述べたので、ここで省略する。

集落に縦(南北)方向の道路は海側と山側の2本あり、それぞれ「道下」と「道上」と呼ばれる。呼び名における「上」や「下」は地形を反映している。この2本の道路は集落内において各住宅列の間を連携する役割のほか、海側の道路は港につながっており、山側の道路は山の斜面に広がるトウモロコシ畑などの場所へつながる。

3. 島に関するイメージと空間のとらえ方

(1) 島のイメージ

前編では、マーイー島という名称は蟻の姿と何らかの関係があると述べたが、村人はこの名称に対して必ずしも満足していないことがヒアリングで分かった。というのは、「マーイー島」という名前は約100年前に外部から付けられた地図上の名称で、それまで島人は「二龍戯珠島」と呼んでいた。「二龍戯珠」とは2匹の龍が玉を遊ぶ意味で、東西マーイー島は2匹の龍と喩えられていたのである。「珠」にあたる玉は、島の南沖にある「猴石」と呼ばれる岩のことで(図-2)、意味あるものとして現在でも大切にされている。一部の年寄りも現在でも自分の島を「二龍戯珠島」と自慢し、「マーイー島」という名称は、風水を悪くしていると考えている。この現象から、東西マーイー島は別々ではなく、観念上、セットとなっていることがわかる。

(2) 居住域を中心とした空間のとらえ方

島に関する空間のとらえ方は、住宅の集まる居住域を中心に、内や外、前方や後方、また、地形

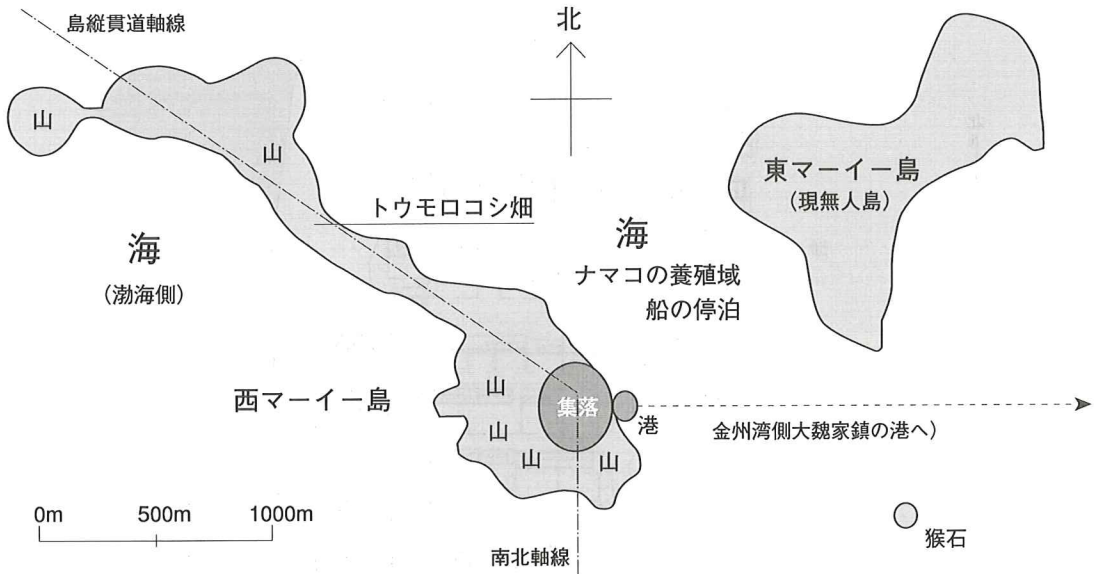


図-1 マーイー島の地形の概略図

と絡んで上や下などの表現が見られる。

内と外：集落自体は「屯」と称されている。「屯」とは集まる意味で、中国では軍隊の駐屯のほかに、村落を表すのに使われる。集落の内部は「屯里」と表現され、それに対し、集落の外側は「屯外」と称される。「屯外」は、山や海、墓地や畑が広がる領域である。

「屯里」においては、その南側は「前屯」と称され、陳氏が集まって住んでいる場所となり、北側は「後屯」と称され、王氏の住む場所となる。むかしは「前屯」と「後屯」との間に広い空き地があったが、しだいに住宅で埋まった。

前方と後方：「屯里」において「前」と「後」の区別があると同じように、島においても、集落より南の部分は「前面」、集落より北の部分は「後面」と表現される。なお、このように称されている範囲や意味などについては、詳細な調査をしなかったが、方位は島の空間分節の一要因であると考えられる。

上と下：「道上」と「道下」のほかに、集落の外側において、例えば海は「海底」と称されている。これは海の底だけではなく、海面も海底も含めて

指している。海は生活範囲の中でもっとも低いレベルにあることが強く意識されていることが言える。それに対し、島にある山々やそこに広がっているトウモロコシ畑などの位置は「山上」と表現される。海は一般的に「海底」と称されると同じように、港も「海底」と称される。両者の使い分けは現在まだ不詳だが、興味深い点である。

陸側と海側：マーイー島の細長い地形やそこにおける集落の立地により、大陸側と渤海側ができる。島における山々の尾根線或いは島縦貫道(「道上」につながる)軸線を境目に、東側は大陸側で、その背面の西側は渤海側である。島の高所に立つと、東側に金洲湾と普蘭店湾が視線に入り、西側に渤海側が開いている(図-3)。大陸側にある金洲湾と普蘭店湾はまた、東マーイー島の介在によって見え方が違う。例えば港に立つと、東マーイー島の遮りによって普蘭店湾が見えず、視線は自然に金洲湾側、特に集落の東方向にある鹿島とその後ろの陸側へ伸びる。この方向はまた、大陸側へつなぐ航路でもあり、朝日の昇る位置でもある(写真-2)。したがって、マーイー島にとって重要な方向の一つである。

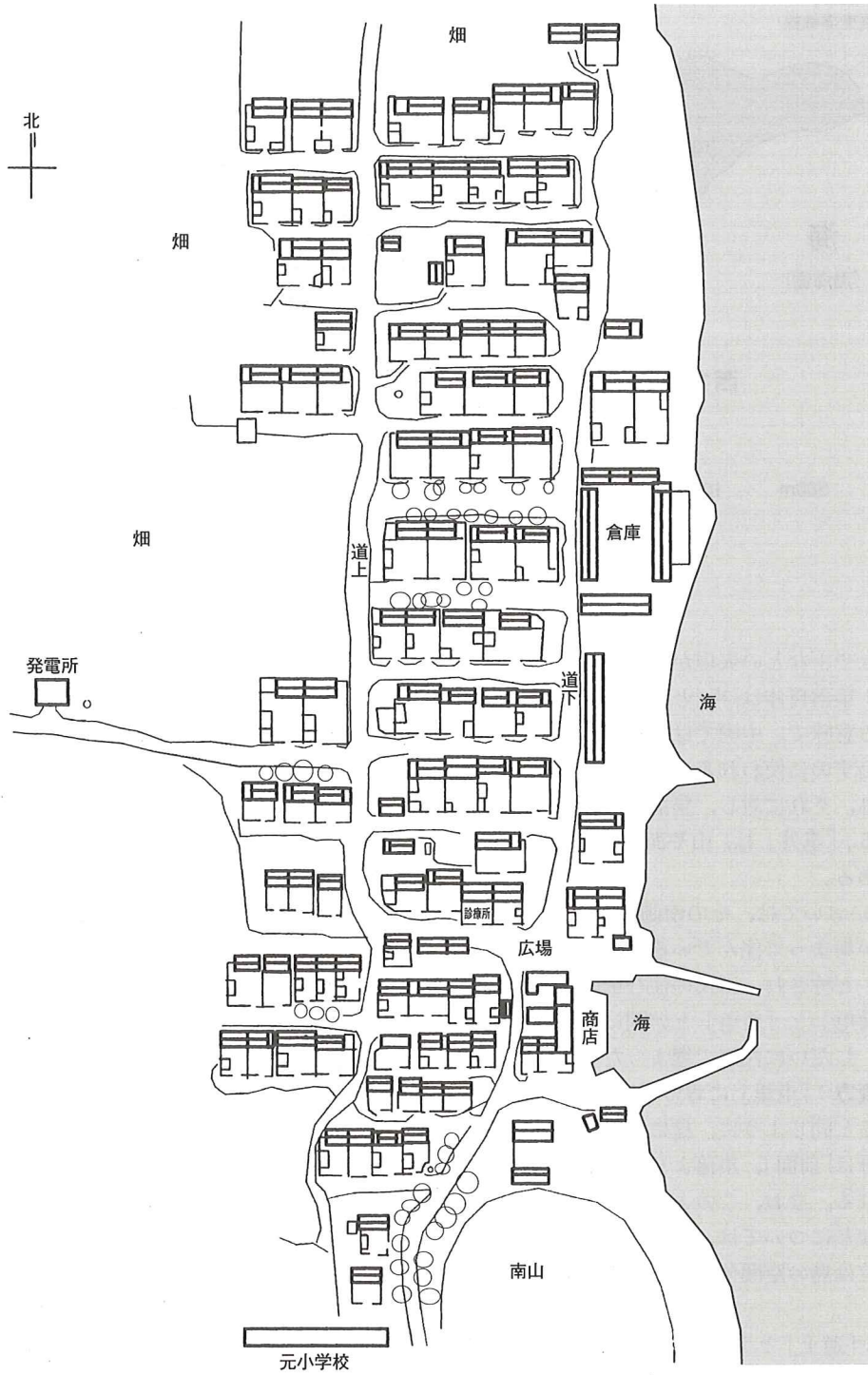


図-2 マーイー島の集落の略図
(2002年9月現在目測による。李恒製図)

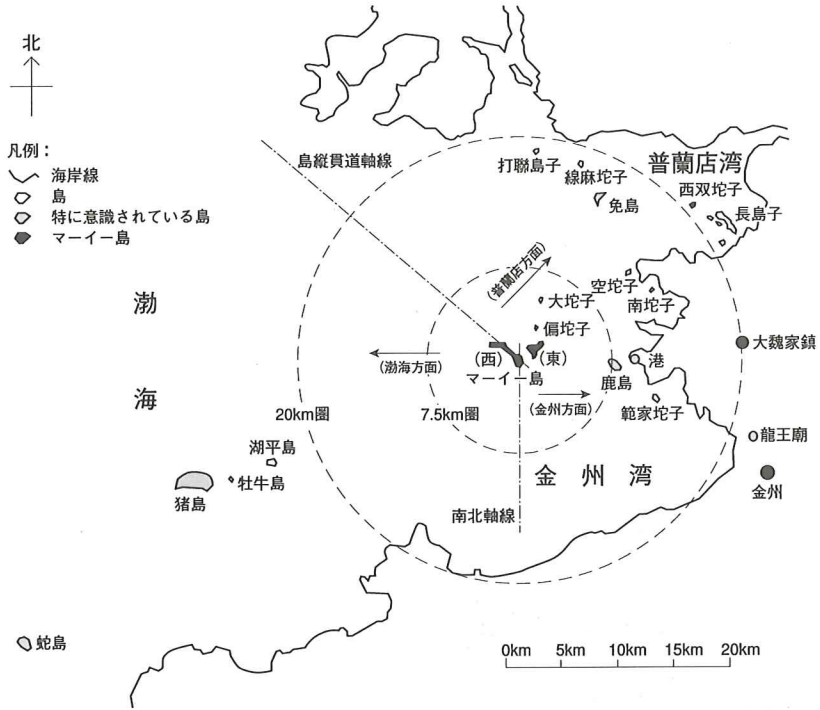


図-3 マーイー島の広域図とその空間分析

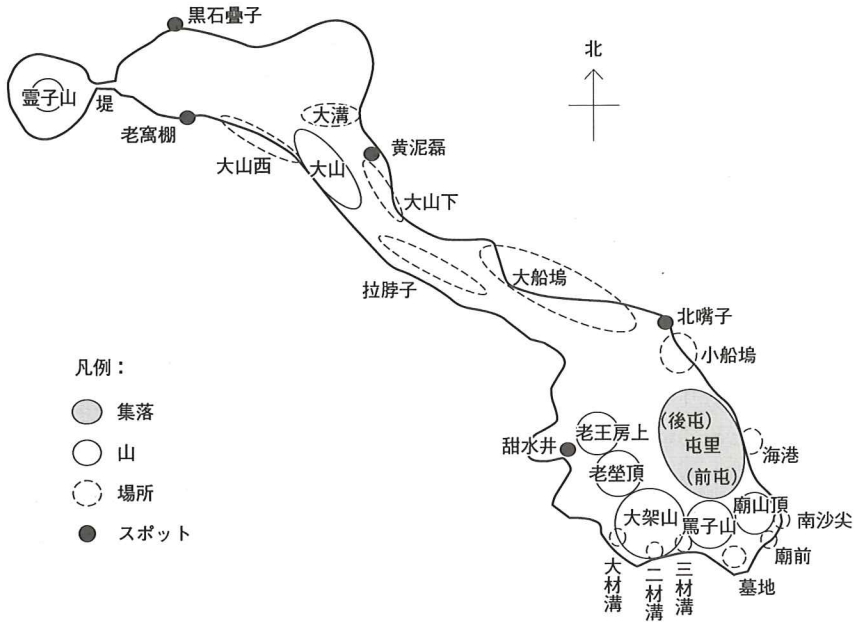


図-4 マーイー島の地名とその場所

普蘭店湾を望むためには、集落の北側に広がるトウモロコシ畑へ行かなければならない。つまり、東マーイー島の北側の海面から望むのである。普蘭店湾には、金洲湾にある「鹿島」のような近距離の島がないため、視線的には金州湾よりも遠い感じがする。

このような立地的な特徴により、行政的に金洲区に属しているマーイー島は視線のレベルにおいても金洲湾と緊密なつながりをもっていることがわかる。



写真一 2 港から東側の日の出を望む
(日の出の方向に鹿島と大魏家鎮方面の山々が見える)

4. マーイー島における地名

ヒアリングにより、島に多くの地名が存在することがわかった。図一4はマーイー島における様々な地名を示したものである。これらの地名は多くの場合、土地の景観的な特徴から由来している。また、それらの地名が示す場所は生活や生産と密接な関係をもっている。

各々の地名は、次のとおりであり、各地名の意味と由来は表一1にまとめている。

- (1) 山々：島に沿って南から北へ順序にいくと、「廟山頂」、「罵子山」、「大架山」、「老塋頂」、「老王房上」、「大山」、「靈子山」(写真一3)がある。
- (2) 島の東側：集落の港から北へ順序にいくと、「小船塢」(写真一4)、「北嘴子」、「大船塢」、「大山下」、「黄泥磊」、「大溝」がある。

- (3) 島の南端：集落の港から南へ順序に行くと、「南沙尖」、「廟前」、「墓地」、「三材溝」、「二材溝」、「大材溝」がある。

- (4) 島の西側：「甜水井」から北へ順序に行くと、「甜水井」、「拉脖子」、「大山西」、「老窩棚」(写真一5)がある。

- (5) 島の北端：島の北側には「黒石畳子」がある。



写真一 3 靈子山と自然堤防



写真一 4 小船塢(右背後は東マーイー島)



写真一 5 老窩棚(奇妙な岩群)

表-1 マーイー島の諸地名における意味

	名 称	意 味
山々	廟 山 頂	「廟」とは山の南側にある宗教施設である媽祖廟のことである。この山は廟の北側に鎮座する山となる。
	罵 子 山	「罵」とはののしることである。ここでは山の南麓にある墓地と関係があると考えられる。墓の頭部はこの山に向いている。
	大 架 山	「大架」とは大きな姿或いは大きな骨格と理解される。この山は島の中でもっとも高い山である。
	老 塋 頂	「塋」とは墓の意味で、「老塋」とは古い墓の意味である。陳氏より古い先住民の墓がこの山にある。先住民は高麗人ではなかといい。
	老王房上	「老王」とは王氏のことで、「房上」とは住宅の上の意味である。この山の麓には王氏の人々が住む「後屯」がある。
	大 山	麓がもっとも広がっている山である。
	靈 子 山	霊のある山の意。この山は集落のある本島とは離れており、自然の砂堤防によって本島とつながっている。山はきれいな円錐形をなしており、山を巡る人間の遭難不死の伝説がいくつかある。
島の東側	小 船 場	小さな砂浜で、小型の船が停泊する場所である。
	北 嘴 子	集落の北側の海上にもっとも出張っている岩で、集落の北の境界を示すポイントの一つとなる。
	大 船 場	長い砂浜で、大きな船が停泊できる場所である。と同時に、カニや貝類などの海の資源をとるために重要場所である。
	大 山 下	「大山」の東麓から海までの一帯の地域。この海側は浜となっており、カニや貝類をとるための重要場所である。
	黄 泥 磊	地質が他の部分と違って、黄土となっているところである。この下には岩と砂利の海岸がある。
	大 溝	自然にできている大きな溝で、中に樹木が密生している。木材が得られる場所である。
島の南側	南 沙 尖	集落の南側の海上にもっとも出張っている砂浜である。生産の場所と同時に、廟と関連する祭の場所の一つでもある。
	廟 前	海の神を祭る媽祖廟のある場所。むかし大きな廟があったが、倒壊した。現在小さな廟が3つほどある。
	墓 地	集落の墓地である。墓はすべて「罵子山」を背山として、死者の頭はこの山に向けて埋蔵される。
	三 材 溝	自然にできた溝で、むかし大きな樹木が密生し、木材を取るための重要場所であった。現在小さな樹木しかない。
	二 材 溝	同上
	大 材 溝	同上
島の西側	甜 水 井	島にある唯一の淡水の井戸である。淡水は「甘い水」を意味する「甜水」という言葉で表現される。現在雨水利用が普及された。
	拉 脖 子	「脖子」とは首のことで、「拉脖子」は首を引っ張る意味になる。ここでは島の前部と後部との間にある細長い地域を、細長く引っ張られた首のようなイメージをとって、表している。カニや貝類をとるための重要場所である。
	大 山 西	「大山」の西側の地域で、浜である。カニや貝類をとるための重要場所である。
	老 窩 棚	「窩棚」とは掘って建て小屋の意で、ここでは、掘って建て小屋を思わせるような奇異な形の岩々のことをさしている。岩が沙海岸の上に突っ張りだすように聳えて、海上から見ると特に素晴らしいという。カニや貝類をとるための重要場所である。
北側	黒石畳子	地質的に黒い石となっている石盛である。岩が風化して、落ちて、自然にできた石盛である。現在でも岩が落ちつづけている。

これらの場所と生活との関連は、例えば、「溝」がつく名称は窪地を意味し、樹木が多く生え、木材が得られる場所となっている。「船場」がつく名称は船が停泊するための場所を示している。その他の海辺の場所は、だいたいカニや貝類がとれる場所となっている。「南沙尖」と「北嘴子」は集落の南北の境界を示す目印と同時に、村の行事を行う場所でもある。

5. マーイー島周囲の遠景について

マーイー島の周りに、いくつかの島が見えることに注目したい。東マーイー島はもっとも近い島として、生活、生産、アイデンティティなどを含め、様々な意味において重要であることが前述によりすでに明らかになっている。

調査の中で、東マーイー島以外のいくつかの島々も人々の話によく出ており、非常に意識されていることがわかった。これらの島とは「鹿島」、「兔島」、「猪島」と「蛇島」である。これらの遠い島々はいずれもマーイー島から眺めることができる(図-3)。

これらの島について進んだ調査をしていないが、ヒアリングと地図の分析からは次のような意味が見出せる。

「鹿島」は東マーイー島の次に、もっとも近い島(約7.5km)であり、マーイー島の大陸への航路上にある重要な目印である(写真-2)。「兔島」は普蘭店湾にある島で、距離は「鹿島」に次ぐ近い島である。普蘭店湾の目印として重要である。「猪島」と「蛇島」はともに渤海側にある島である。「猪島」はこの一帯でもっとも大きい島で、渤海側に良く見える島でもある。「蛇島」はマーイー島にとって、渤海側に見えるもっとも遠い島で、渤海湾の端の目印となる。

この一帯は「坨子(トゥオツ)」という名前の島もある。「坨子」とは岩の塊の意味で、「島」とは違って、一般に人が住んでいない。「坨子」は目印としての意味があると考えられる。

6. まとめ

以上の考察で、マーイー島には地名によって識別された場所が多く存在していることがわかった。これらの地名は土地の景観的な特徴と多く関係し、各々の場所は生活や生産と密接に関係していることが注目すべき点となっている。また、島は孤立したものではなく、周囲に見える他の島との関係において意味があり、広い環境の中で構成されることも本考察で見出されている。これらの事実についてさらなる実証や理論的な分析を加えることは今後の課題となる。

これまでの調査で残された不明な点に関しては、今後さらに補足したいと考える。

謝 辞

今回の調査は中国大連理工大学人文社会科学学院の柳中権教授の紹介を得ており、大連市大魏家鎮後石村の陳玉圭書記やマーイー島村の陳永茂書記、王忠強主任、陳朝宦先生から多大な協力を受けた。本考察における多くのヒアリング情報は、旧小学校の先生である陳朝宦先生の熱心な提供によるものである。また、常に笑顔で訪問を受けてくれるマーイー島の村民の皆様にも謝意を表わしたい。

補注および参考文献：

- (1) 李桓：中国大連金州区マーイー島調査報告：長崎総合科学大学紀要43(1), 75-80
- (2) 柳中権, 早川和男, 伴丈正志, 李桓, 艾麗晶, 潘麗娟 (2002.09)：季節集団居住とコミュニティの役割：第3回中日韓居住問題研究会発表論文集：12-14
- (3) 李桓：中国・大連市マーイー島における居住と福祉の実態：平成12年度～13年度科学研究費補助金基盤研究(B2)研究成果報告書：離島における居住福祉の成立条件に関する研究(研究代表者 早川和男)：59-70